

孫文と近代中国

——日本・アジアへの視角——

電気通信大学名誉教授

藤井昇三

藤井

ただいまご紹介いただきました藤井昇三でございます。

本日は一〇周年記念のシンポジウムにお招きいただきまして、大変光栄に存じております。先ほどは小崎先生の、東亜同文書院出身者についての大変詳細なご研究を拝聴し、続いて栗田先生の同文書院の意義についてのお話を拝聴し、教えられるところ多大で、まことに目の覚める思いでございます。お二人のご講演から大変感銘を受けましたことを感謝申し上げます。

本日の私の主題は「孫文と近代中国」、副題は「日本・アジアへの視角」と致しました。レジュメをご覧いただきながらお聞きいただきたいと思えます。早速本題に入らせていただきます。最初に革命家孫文の現代的意義について簡単にお話ししたいと存じます。近代から現代にかけての外国の政治家、あるいは革命家の中で、孫文ほど日本と関係が深く、また日本で様々に論じられてきた人物は他には見当たりません。毛沢東らによって推進されましたあの狂気

の一〇年にわたる「文化大革命」が終わりまして、鄧小平の改革・開放の近代化政策が始まりましたのが一九七八年です。今年で二五年、四半世紀が経ちました。

この改革・開放政策が始まって以来、中国では孫文の評価が非常に高くなってきております。数年前に、当時の江沢民主席が、近代から現代にかけての中国に最も貢献した人物として孫文、毛沢東、鄧小平の三人を挙げております。その理由は何でしょうか。

孫文が傑出した革命家として共和制中国を創設したという歴史上の功績が高く評価されているからだけではありません。孫文が現代中国の近代化の途上におきまして、近代化の先駆者として評価されているからでもあります。中国政府が今進めております長江（揚子江）上流の三峡ダムの建設工事は、現在着工から八年、すでに発電も始まっており、二〇〇九年には完成の予定です。世界最大級の長江・三峡ダムの建設につきましては中国の内外で賛否両論があります。この三峡ダムの最初の発案者が孫文であったと

東亜同文書院大学記念センター
設立10周年記念シンポジウム

東亜同文書院の軌跡と日中関係への展望

共催：愛知大学同窓会・親睦会・霞山会・I.C.C.S（愛知大使館国際中国学研究所センター）



いうことは広く知られております。

孫文が三峡ダム建設を考えました第一の目的は洪水対策であります。孫文の近代国家建設の壮大な計画の一つが、孫文の死後約八〇年近く経ちました現在、実現しつつあります。また現代中国が力を入れております幹線鉄道、道路の建設なども、孫文の国家建設計画の重要な柱でありました。また政治面で申しますと、中国政府が台湾に本土復帰、中国統一を呼びかけます度にしばしば引用するのは、孫文の晩年の国共合作、国民党と共産党の提携の政策であります。

このように孫文は近代中国の民主革命、また近代化の先駆者として大陸中国では讃えられております。台湾での孫文評価はさらに一段と高いものがあります。台湾にとって孫文は「中華民国の建国の父」、つまりいわゆる「国父」であります。また中国国民党の創設者でもあります。このように孫文は大陸中国と台湾の双方にとりまして、非常に大きな意味を持った人物であります。単に共和制の創始者という歴史的な英雄であると同時に、現代における重要な政治的意義を有する人物でもあります。そこに共通の極めて高い評価が生まれる理由があると考えられます。

このような現代的意義を持つ孫文の五八年の生涯のうちで、革命運動に全力を投入したのは約三〇年でありました。一八九四年に興中会という最初の革命組織を作りましてから、孫文の死んだ一九二五年までの三二年間の前半は、辛亥革命への道であります。そしてこの時期には孫文が九死に一生を得る事件がありました。ロンドンの清国公使館拉致監禁事件です。一八九六年、誘われて清国公使館に連

れ込まれて、監禁された孫文は、処刑のため本国へ移送される直前、香港の西医書院在学時代の恩師カントリーの献身的な奔走のお陰で、辛うじて救出されました。そして一九〇五年には、東京で中国同盟会を結成します。結成に際しては、日本人の援助者が陰で非常な援助をしております。中国同盟会で革命派の三派が合流致しまして、これ以後革命派の勢力は一気に強まり、六年後の辛亥革命につながって行きます。

一九二二年一月一日に成立しました中華民国は、中国で最初の、またアジアでも最初の共和国でありました。しかしすぐに袁世凱の専制支配に取って代わられまして、清朝打倒が成就したのも束の間、今度は軍閥支配との戦いが、一九一三年以後孫文の死ぬ二五年まで続くことになりました。その間孫文は袁世凱死後の軍閥混戦の中で、広東政府を一九一七年に樹立し、その後二回にわたって広東政府を改組しております。そして晩年の一九二四年には連ソ・容共・労農援助という三つの基本政策を掲げ、また同時に反軍閥・反帝國主義の闘いという目標を明確に打ち出して、翌一九二五年には「革命なお未だ成らず」という有名な遺言を残して、肝臓癌のため満五八歳で生涯を終えます。

次に孫文と近代日本の関係で、まず「革命運動の避難所・根拠地としての日本」について。孫文が日本にやってきたのは、合計一五回。そのうち一二回が亡命で、あとの三回は公式・非公式の訪問であります。亡命期間は通算約九年間にわたっております。横浜で五年間、東京で四年間、その他各地で短い日数滞在しています。五八年間の生涯のうち、孫文が革命に従事した期間が三一年間、海外亡命の

期間が約一五年です。つまり革命運動の三一年間のうち半分は海外生活、それも亡命生活を送っております。その五年のうちの九年間、ちょうど六割が日本での亡命生活になっております。孫文にとつて日本は最も重要な亡命先であり、また避難場所でもありました。孫文は日本で革命の準備を進めます。革命勢力の結集、そして組織作り、また資金集め、武器・弾薬の調達、これらはほとんど全て日本で行なつた革命の実際の行動であります。

レジュメにあります「対日依存から対日批判への転換」について。孫文の革命運動の目標は、最初は清朝打倒でしたが、辛亥革命以後は共和制国家・中華民国の樹立、そしてそれに続く民主的な国家建設のための軍閥との闘い。こういう目標に変わりました。この目標のために孫文は列国からの援助をしばしば要請しております。特に第一次大戦の時期、一九一八年までがその傾向が非常に強かったのであります。それはいわば武装蜂起中心主義、つまり、各地で武装蜂起をして、それによつて政権を奪おうという、戦術が主流であつたからであります。そのため列強の援助を得ようとして、中国の主権の一部を危うくするような、言わば冒険主義的な方法をとつたこともしばしばあります。また孫文が援助を求めた列国は、日本を始めとしてイギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、ソビエト・ロシアなどに及んでおります。こうして一九一九年の始め頃までは、孫文は主として日本の政府・軍部・民間人に接近して援助を受けることに努めております。しかし、一九一九年半ば以後、孫文は基本的には日本批判に変わっていきます。

レジュメのあとに添付した参考資料「孫文に関わつた人

びと」の最初の梅屋庄吉、萱野長知、宮崎滔天、山田良政、山田純三郎の五人は特に孫文に対して純粋な、私心のない援助を与えた特筆すべき人々です。同文書院の関係者である山田良政、山田純三郎兄弟もそうです。この五人は五十音順に配列しましたので、この順番に差があるわけではありません。

この中で最初の梅屋庄吉から説明しますと、革命運動の隠れた援助者として名前が出ることを避けて、あくまでも縁の下の力持ちに徹し、また孫文の革命資金の大部分を支えた実業家であります。現在の日活映画会社の創始者であります。映画製作と上映、特に白瀬中尉の南極探検の記録映画で莫大な利益を上げます。それらのほとんど全てを孫文の革命運動に提供しております。まさに財をなげうって革命を支援し、そのため晩年は貧困のうちに病死しております。一九一六年、第三革命の準備時期には滋賀県の八日市に飛行学校を作り、中国人留学生を飛行士として養成しました。そして袁世凱と戦う第三革命のため、二台の飛行機を中国山西省に派遣しております。また、孫文の死後は銅像を四つ作り、孫文ゆかりの中国の四か所に寄贈しております。南京中山陵の孫文銅像などです。さらに孫文の胸像（ブロンズ像）をたくさん作り、日中両国の革命関係者に寄贈しております。

次の萱野長知は、一貫して孫文革命を熱心に援助しております。特に孫文の日本亡命の際、孫文が第二革命の後日本上陸を一時禁止された時に、その禁止措置を解除するために当時の山本権兵衛内閣にたいして、犬養毅、頭山滿を動かして政府に働きかけ孫文の上陸を黙認させることに成

功します。もし禁止されて上陸することができなかったなら、孫文は日本上陸を諦めて、危険な別の土地に亡命せざるを得なかったと思います。萱野長知も孫文の援助者として非常に大きな貢献をした一人です。

三人目の宮崎滔天。これは言うまでもなく初期から孫文の革命運動に対して思想的な共鳴、アジア主義に基づく中国革命に留まらず、将来の世界革命を目指すということで孫文と意気投合して以来、梅屋庄吉とは違い、貧窮のどん底にありながら妻や子供を荒尾の実家に帰して、妻子を養うのではなくて孫文を養うために浪曲師になって、収入を得ようとはしました。中国革命から取材した曲詞を演ずるのが珍しいというので初めのうちは観客がつかめかけましたが、二日目からは観客が来なくなつたといわれます。一途に孫文のために尽くした人物であります。

四人目の山田良政は先ほど小崎先生のお話にありましたように、中国革命に命を捧げた最初の外国人であります。これは栗田先生のお話にもありました。一八九九年に孫文と知り合つて、翌一九〇〇年の武装蜂起、惠州蜂起に参加して命を落とすことになりました。

資料の五人目の山田純三郎につきましてもお話が出ました。簡単に述べますと、東亜同文書院の在学中に孫文と上海で知り合つております。その後孫文が死ぬまで一貫して孫文の革命運動を援助して、特に辛亥革命の一九一一年から一九一二年にかけましては、孫文の財政を助けるために日本側との借款交渉の仲介者として努力しております。また第三革命中の一九一六年五月一八日、ちょうど純三郎の誕生日に、革命派の孫文の片腕と言われました陳其美が革

命派のアジト・秘密の会合場所として使っていた上海フランス租界の山田純三郎の自宅で、袁世凱の暗殺者のためにピストルで殺されました。この時袁世凱の刺客は金儲けの話を持ち込んできました。石炭の鉱山の利益が入るといので、陳其美は山田純三郎の自宅でその刺客である人物を確かめずに会います。そして対談中に地図を広げたままで撃ち殺されております。

この時に山田純三郎の長女、前の年に生まれたばかりの民子さんは、お手伝いさんの女性に抱かれていたところを、暗殺者のピストルの弾がお手伝いさんの耳に当たり、驚いて取り落とされた長女の民子さんは固い床に落ちて、その後身体的にも頭腦的にも不具となって、一生重度身障者としての生活を送るようになります。それをお世話したのは山田純三郎の四男であった、これも先ほどお話の出した山田順造さん夫妻です。民子さんの亡くなる直前までお世話が続いております。山田純三郎はよく家族を集めて正座をさせてこう言ったそうであります。「民子姉さんは（藤井註：これは順造達、妹や弟に対して言っているのですが）わが家の宝だ。日本と中国の友好の証だ」と言つて、民子さんが重傷を負ったことの意味を子供達の心の中に刻みつけたのであります。

こうして山田兄弟は揃つて孫文の中国革命のために献身しました。以上、最も孫文を助け、また広く知られている五人の人物だけに触れました。参考資料には、その次に、犬養毅、頭山満、南方熊楠、白岩竜平、三上豊夷、鈴木久五郎など、孫文を様々な側面から援助した人々が載っています。最後の大隈重信は革命派を援助していませんが、立

憲派を支持しています。二一か条要求当時の首相を務めた人物です。久原房之助は一九一五年から一九一六年にかけて、当時参謀次長であった田中義一の要請を受けて、孫文や中国国内のいろいろなグループに、袁世凱打倒のために資金を提供しています。孫文に関わった人々を何人か挙げておきました。

孫文の対日態度がどういうふうに変つたかということについては先ほど述べました。孫文の日本に対する依存の顕著な例の主なものだけを挙げておきますと、一九〇五年に中国同盟会を日本で結成するに当つて、日本人が最初のお膳立てから会場の準備まで全部やりました。同盟会結成という中国革命の大きな前進となつたこの時期の日本人の援助をまず挙げる事ができます。辛亥革命の直後、一九一一年から一九一二年にかけて、孫文は全面的に日本の財政援助に頼つています。革命派は武装蜂起を一〇月一〇日に起こしました。それ以後、日本側の、特に民間人達が、借款の提供、鉄道、鉱山、航運業などを担保として、かなりの額の財政援助をしております。この時期に革命派の手に渡つた額は、少なくとも当時の金で約六〇〇万円にのぼっています。

一九一二年二月満洲租借借款の約束が成立します。孫文と三井物産の社員であつた森恪（後に政界に進出し五・一五事件の黒幕の一人とも言われている）との秘密会談で日本側は満洲の租借を要求します。桂太郎から三井物産の益田孝を経て森恪に伝えられた密命に基づいた行動です。一〇〇〇万円の借款と引き換えに、孫文は満洲租借に同意致します。

しかし日本側は種々の理由で一〇〇〇万円借款に踏み切ることができませんでした。列国の非難を浴びる恐れがあること、国内でも野党の反発を受けるに違いないこと、など様々な理由のために実現しませんでした。もし実現していたら、すでにこの一九一二年に、約二〇年も早く後年の満洲国への第一歩が踏み出されていたかも知れません。満洲租借が実現しなかったことは、孫文にとつて、また日中両国にとつても、幸いだったと私は考えております。

それから孫文の日本に対する依存の例として、孫文は日本亡命中の一九一四年、第一次大戦の勃発する年ですが、大隈首相に秘密の書簡を送つて、日本が孫文の革命を援助して袁世凱打倒に成功するならば日本人に対して内地雜居を許可し、中国市場を日本に開放し、関税同盟を結んで日本からの輸入品は無税とする。こういう手紙を出しております。しかし、大隈はこれを拒否して返事を出しておりません。

また一九一五年、先ほど触れました二一か条要求の時期ですが、この時期に孫文は日本側の民間人山田純三郎、犬塚信太郎（満鉄理事）と、中国側として孫文、陳其美（暗殺直前の）の間で、日中盟約という秘密の約束文書を取り交わしております。二一か条要求に近い内容が含まれており、武器の統一その他共通点がいくつもあります。ただこの盟約は中国側の利益も含まれていますので、その点では双務的と言うか日本側、中国側、両方に利益がある内容にはなっている。この日中盟約の資料につきましては、私が発掘して発表しましたところ、台湾側から「偽物である」と非難されました。「愛国者の孫文が二一か条要求に近い

内容の約束を日本とするはずがない。愛国者の孫文にそんなことはあり得ない」という趣旨の理由が中心です。私は台湾あるいはハワイで行なわれた国際シンポジウムで、台湾側の特に国民党関係者・研究者から烈しい批判を受けました。「日中盟約は偽物である。筆跡がおかしい」など正当な根拠のない無責任な発言も台湾側から出ました。

しかし欧米の研究者は逆でした。懇談の席で「あり得ることだ」と肯定的な発言がありました。かれらは直接資料を見ていませんので、本物だとも言えない。しかし台湾の研究者のように頭から偽物・偽造を言うようなことはありませんでした。

こういつた日本に対する依存の態度が最もよく現れているのが一九一七年、第一次大戦末期の、孫文が書いた「中国存亡問題」という論文です。その中で孫文は「日本と中国の関係は存亡安危が相い関連している。日本なくして中国なく、中国なくして日本はない」と述べて、日本との固い友好関係を強調しております。こうした第一次大戦頃までの孫文の日本に対する依存の態度が、基本的に転換するのは一九一九年の後半からであります。ちょうど一九一九年はパリ講和会議が開かれております。日本は山東省のドイツの権益を奪い取つて日本の手に収めました。このことは中国側から轟々たる非難を浴びました。

このパリ講和会議の直後、孫文は東京朝日新聞に寄せた一文の中で、日本の帝國主義の野心を初めて公然と非難し、日本を強盗にたとえております。この一九一九年の六月以後、孫文の日本批判は、公然かつ強硬となつてきます。パリ講和会議での山東問題、これが直接の原因であります。

それと同時にこれまで第一次大戦の時期まで、日本政府や軍部は一貫して孫文の革命に反対してきました。辛亥革命前には清朝支持の態度を取り続け、辛亥革命以後は孫文と敵対する軍閥政府（袁世凱らの北京政府）をほとんど常に支持し続けた。例外は第三革命の準備期、大隈内閣と田中義一らの陸軍の一部の中堅將校達が、袁世凱を倒すために一時的に孫文を利用して孫文に援助を与えました。それ以外は日本の政府・軍部は、一貫して反孫文、北京政府支持を続けてきました。孫文はこうした日本政府・軍部の北京政府援助の政策の故に中国革命は失敗したのであると言っています。

それから五四運動からの影響。五四運動で民衆の力がいかに大きいかが、世論の力、これに依拠することの重要性、また、ロシア十月革命からの影響もあります。これも民衆の力で革命を成功させた。こうして従来の孫文の革命の戦略であった武装蜂起中心、武装蜂起を各地で起こして北京政府、軍閥を打倒するという武装蜂起中心主義から脱却し、まして、まず国内で民衆の世論を喚起する。民衆への宣伝、民衆の組織化、それは本当の意味の国民革命であります。こうした戦略の転換が、孫文の日本への対応を基本的に変えさせた一番大きな原因であったと思われまます。

そしてこれ以降も孫文は日本に対する批判を強めております。その顕著な事例を挙げてみますと、一九二三年、鶴見祐輔（後に雄弁家・評論家として有名になります）が広東政府を訪ねた時に孫文と対談しています。この時孫文は「過去二〇年間日本は中国政策でことごとく失敗した。辛亥革命以後の日本の北京援助政策はことごとく中国人の期

待を裏切った近視眼的な政策である」と断言しております。

また、一九二四年一月から八月にかけて、孫文は「三民主義」講演を広東で行います。その中で日本批判がいくつか出ております。例えば侵略の危険性が大きい国を四つあげておりまして、アメリカは一月で中国を滅ぼせる。イギリスとフランスは遠いから二か月かかる。しかし日本は一〇日以内で中国を滅ぼすことができる、と言っています。

それからさらに三民主義講演の中で、日本人と日本は、個人としても国家としても信義を守らない。個人としては日本人は、契約を結んでも守らないことがしばしばある。しかし中国人は口約束でも守る。国家としての日本については、朝鮮植民地化を挙げています。朝鮮の独立を約束しておきながら、朝鮮を植民地とした。逆に日英同盟のよしみと口実にして、利益目当てで第一次大戦に参加している。こういう矛盾したやり方を、信義を守らない例として挙げております。三つ目に日本の天皇制に対する婉曲な批判をしています。孫文は「人類の進歩は、原始時代から始まって神権の時代、三つ目が君主専制の時代、四つ目が民権の時代だ」と、四つの段階に分けて、日本はまだ二つ目と三つ目、神権と君権を併用している段階だというふう言っている。それ以上のことは言っていない。直接的に非難してはいませんが、段階の二段階目と三段目にすぎないと行って、婉曲に天皇制を、共和制を主張する立場から批判しています。

四つ目は日本の弱小民族圧迫への批判であります。特に朝鮮を植民地化したことを非難しています。イギリスはビルマを植民地化した。フランスはベトナムを、そして日本

は朝鮮を滅ぼしたではないか、と述べています。これはまたあとで触れたいと思います。

孫文の日本批判の最後として、一九二四年の「大アジア主義」講演があります。孫文は最後の日本訪問の機会に、日本側から「大アジア主義」というテーマで講演を頼まれ、そこで先ほどの栗田先生のお話にありました王道・霸道を対比しながら、日本の霸道政策を批判しております。ここで孫文は「霸道」という言葉を、「武力による威嚇、あるいは圧迫」という意味に使っているようであります。

こうした孫文の日本に対する批判的な態度が強まっていた中で、先ほど申しました孫文に関わった人々、宮崎滔天、山田兄弟を含む五人の人々のような純粋な、私心のない献身的な援助者との交流は続いております。滔天は一九二二年に亡くなっておりますが、その他の梅屋、萱野、山田純三郎との親密な関係は続いております。

孫文のアジア主義については、例えば具体的には一八九九年、日本人と共にフィリピンの独立運動を援助しております。独立軍に武器を輸送していた布引丸が沈没して、武器弾薬が海の藻屑と消えるという布引丸事件の悲劇もありました。この孫文のアジア主義は、日中提携を基礎とするものであります。同時に先ほど栗田先生のお話に出てきましたが、黄色人種と白色人種が互いに対立し、闘争するという黄白人種闘争観も孫文にはありました。この二つを基礎にして孫文のアジア主義が生まれてきました。しかし第一次大戦のあと、この内容が変わってきます。日中提携が先ほどの日本帝国主義批判開始以後変わって参ります。日本に対する批判が中心になってくる。同時に「同人種同

盟」の考え方が否定されるにいたります。アジアの被抑圧民族と抑圧民族、ヨーロッパの被抑圧民族と抑圧民族が團結するのではなく、アジアとヨーロッパの被抑圧民族同士が團結し、アジアとヨーロッパの抑圧民族同士が團結する。そして世界の将来の戦争は抑圧者と被抑圧者の闘いになるだろうという考え方が生まれてくる。黄白人種の闘争という考えがすっかり変わってきたのです。それは孫文のアジア主義の変質ということができます。

こうして孫文の「大アジア主義」講演の中でそれがはっきり出てきます。この「大アジア主義」講演で孫文が言わんとしたことは、大アジア主義という考えが成り立つためには、被抑圧民族のために不平等を打ち破ることである。それは王道を基礎とするものである。これが一番重要な点だと思えます。孫文はこの講演の初めのほうで、日本の日露戦争の勝利を高く評価しています。アジアの民族運動を刺激して、非常に意義があつたと言っています。また明治維新後の条約改正運動の成功、この点でも日本を評価している。しかし言わんとしているのはアジアとヨーロッパ、王道文化と霸道文化の対立である。そして道義を基礎としたアジアの伝統的な王道文化に基づいて不平等条約を廃棄して欲しい。それが大アジア主義を成立させるための条件であると言っている。最後にこの大アジア主義講演の結びのところで孫文は「日本が西洋の霸道の手先となるか、東洋の王道の守り手となるのか、日本国民は慎重に考えて選んで欲しい」という婉曲な言い方をしています。しかし文脈から言えば、日本は抑圧国家に入っているわけです。ソビエトのみは王道国家であると言っています。そうします

と婉曲ではありますが日本に王道に戻って覇道政策の放棄、具体的には不平等条約を廃棄するように要求したものであるということができません。

時間がありませんで結論に移ります。孫文の民主共和国樹立のための三一年にわたる不屈の革命運動、これは中華民国の樹立で一応成功しましたが、その後は凶悪な反動的軍閥政府との闘いが続きました。また外から反植民地中国の取奪を続ける帝国主義列強に対する不平等条約・不平等関係の撤廃を目指す反帝国主義のために、孫文は全力を傾けました。それは中国のみでなく世界の被圧迫民族解放の構想へと発展し、拡大していきます。

その間に孫文が接触し、交渉する相手は、国外においては主として日本であります。私心のない献身的な支援を惜しまなかった一部の日本の民間人、山田兄弟達は、その意味では孫文の革命運動にとって極めて大きな役割を果たし、時には死活の重要性を持ったこともありました。こうした中で孫文は、革命運動の初期のアジア主義に代えて、新しいアジア主義の構想を模索するようになりました。それはアジアの王道文化を基礎とする、アジアの被圧迫民族団結の構想であります。そして孫文は日本の中国政策、アジア政策を批判するのみでなく、列強の帝国主義政策を厳しく批判するようになります。将来強国になったときに中国は、現在の列強のように弱小民族を圧迫してはならない、つまり列強の帝国主義を真似てはならないということを、まだ弱国である今のうちに中国は決心しておかなければならない。こう言っています。さらに、弱い者を救い、危い者を助ける、そして列強に抵抗する。これを将来の中国の目標

にすべきである。中国が強大になったらそうしなければいけないと言っております。

最後に、孫文の「大同」の理想像について述べておきたいと思えます。孫文の「大同」についての発言を見てみると、孫文は世界の未来像として「大同」を掲げております。これは孔子の「礼記」の「礼運篇」に出てくる言葉であります。孫文が頭の中に描いているのは、まず民族主義によつて民族の平等を実現した後、大同世界を作らねばならないという夢であります。この「大同」というのは孫文の理解では、人間が助け合い、満ち足りた生活を楽しむことができるような平和な理想社会、一種のユートピア（理想郷）です。

そして孫文は、「ソビエトの主義は孔子の大同である」と言っております。新しく生まれたばかりの社会主義国ソビエトの目標と、孔子の大同の理想は同じであるという、こういう発言にはいろいろな解釈を呼ぶ余地が残されています。一つの解釈としては、中国に抜き難い、古代中国賛美の傾向。あるいは別の解釈では、社会主義・共産主義への親近感の表れであったのかも知れない、というような解釈が可能です。

時間がきましたので、孫文が晩年夢に描いた大同世界という未来像に触れまして、本日の拙い報告を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

配布資料 (藤井昇三)

一、はじめに

孫文の現代的意義

二、孫文の革命運動の三〇年

(一) 辛亥革命への道(一九一一年。専制君主制・清朝の打倒)

興中会(一八九四年)

ロンドンの清国公使館監禁事件(一八九六年)

中国同盟会(一九〇五年)

(二) 中華民国の樹立(一九一二年。中国・アジア最初の共和制)

軍閥・袁世凱の専制支配との闘い(一九一三年)

袁世凱死後の軍閥混戦の中の広東政府(一九一七年)

連ソ・容共・労農援助の三大政策(一九二四年)

反軍閥・反帝國主義の闘い(一九二四年)

「革命未成功」の病死(一九二五年。満五八歳)

三、孫文と日本

(一) 革命運動の「避難所」・「根拠地」としての日本

渡日十五回(亡命十二回、訪問三回)

滞日約九年(横浜五年、東京四年、その他)

(二) 対日依存から対日批判への転換

一九一九年を転機に

四、孫文とアジア

(一) 孫文の「アジア主義」

日中提携論

黄白人種闘争観

(二) 「大アジア主義」講演

アジア文化は王道、ヨーロッパ文化は覇道

不平等条約廃棄

五、結論

民主主義中国建設への苦闘

世界の被圧民族解放の構想

大同世界への夢

孫文にかかわった人びと

梅屋庄吉(一八六八—一九三四年)

明治・大正・昭和期の実業家。熱心な孫文援助者。長崎県出身。香港で一九〇五年孫文と会い、その革命思想に深く共鳴し、財を傾けて革命運動を援助し続け、名前が表面に出ることを避け、革命の隠れた支援者として終始した。梅屋は映画事業などによる収益の多くを孫文らの革命運動の資金に提供しただけでなく、宮崎滔天・萱野長知らの革命援助活動を経済的に支援し、また孫文と宋慶齡の結婚は、主として梅屋夫妻の尽力によるものであった。孫文の死後、孫文の銅像四基を中国に寄贈。また孫文のプロンズ像を多数つくり関係者に贈った。

萱野長知(一八七三—一九四七年)

高知県出身。一八九五年孫文と知り合い、その後宮崎滔天・梅屋庄吉・山田純三郎らと並ぶ献身的な孫文援助者として、孫文の死まで一貫して熱心に革命運動を支援した。一九一三年第二革命失敗直後孫文の日本亡命の際は、孫

文上陸禁止方針の日本政府を翻意させるため、犬養毅・頭山滿らと緊密に連絡を取りつつ奔走した。一九一四年孫文の中華革命党結成に深く関与し、孫文と黃興の対立の相解に尽力した。

宮崎滔天みやざきたうてん（一八七二—一九三二年）

熊本県荒尾市出身。本名は虎蔵、通称寅蔵。白浪庵滔天と号したので、多く宮崎滔天と呼ばれる。兄の八郎・民蔵・弥蔵と共に自由民権思想の家庭に育ち、一八九七年以来孫文の革命思想に深く傾倒し、貧窮の底にありながら終生孫文の革命運動を献身的に支援。まず中国革命の成功を図り、究極的には世界革命の実現を旨とした。フィリピン独立運動や惠州起義などで孫文を援助したが失敗し、一時革命運動から離れて浪曲師となり、自作浪曲「落花の歌」を吟じた。中国同盟会設立後の内訌に当って、一貫して孫文を支持し、孫文からの信頼は極めて篤かった。

山田良政やまだよしまさ（一八六八—一九〇〇）

中国革命における最初の日本人犠牲者。青森県弘前市出身。東京昆布会社社員として上海支店勤務の後、日清戦争に通訳官として従軍。一八九九年日本亡命中の孫文と東京で知り合い、孫文の革命運動に深く共鳴。一九〇〇年東亜同文会経営の南京同文書院の教授兼幹事として赴任。革命軍の惠州挙兵に先立って孫文を伴い台湾に渡り、台湾総督児玉源太郎、民政長官後藤新平との協力・援助交渉を斡旋した。挙兵後、革命軍の指揮官鄭士良に孫文の密命を伝えるため惠州に潜行し、帰途戦死した。中国革命援助のため犠牲となった最初の外国人である。東京谷中の全生庵に記念碑が建てられた。

山田純三郎やまだじゆんざう（一八七二—一九〇六年）

献身的な孫文援助者。満鉄社員。青森県弘前市出身。山田良政の弟。一八九九年南京同文書院在学中に上海で孫文と知り合う。以後孫文の死まで、一貫して孫文の革命運動を援助した。一九一一年から一二年にかけて、孫文と日本側の借款交渉の仲介者として尽力し、その後の孫文の日本亡命中も熱心に支援を続けた。第三革命中は上海フランス租界の自宅を革命派の秘密会合所に提供し、一九一六年五月陳其美が同所で暗殺された際には山田の家族も不治の重傷を負った。一九二五年三月孫文の臨終に立ち会った。

犬養毅いぬかいじゆ（一八五五—一九三二年）

明治・大正・昭和の政治家。岡山県出身。本堂と号した。新聞記者を経て、一八九〇年第一回衆議院総選挙以来十八回連続当選。政党内閣制確立を旨とし、二次にわたる護憲運動の先頭に立ち、尾崎行雄と共に「憲政の神様」と称された。日本に亡命した孫文・金玉均らを保護・援助し、アジア民族解放運動に一定の理解と同情を示した。特に孫文の亡命に対して、物心両面の支援を惜しまなかった。しかし一方では、大陸への国権拡張、利権獲得の意図も有していた。議会制擁護を主張して軍部急進派などの攻撃的となり、一五事件で暗殺された。

頭山滿かぶらみ（一八五五—一九四四年）

明治・大正・昭和期の國家主義者。福岡県出身。父は黒田藩士・筒井亀策。母の実家頭山家の養子となる。明治初期、国会開設運動に参加したこともあったが、民権論を離れ国権論に傾倒し、一八八一年箱田六輔・平岡浩太郎らと玄洋社を創立。右翼の巨頭、政界の黒幕として知られた。孫文、金玉均、ビハリ・ボースらのアジア亡命政治家を保護・援助したが、主として国権拡張、大陸侵略の足がかりとする意図にもとづくものであった。

南方熊楠みなかたけ（一八六七—一九四一年）

明治・大正・昭和期の植物学者・民俗学者。一八八六年渡米の後、動植物の採集・研究を行い、一八九二年ロンドンへ行き大英博物館東洋調査部に入る。一八九六年、ロンドンの清国公使館に拘禁された孫文は、釈放の後、大英博物館に通い、南方と対面。以後、孫文がロンドンを去るまで親しく交流した。南方は一九〇〇年に帰国、先に来日していた孫文と一九〇一年二月、和歌山で再会した。

白岩竜平しらいわりゅうへい（一八七〇—一九四二年）

明治・大正・昭和期の実業家。岡山県出身。日清戦争後の日清講和条約で認められた長江の内河航路を實現しようと考えて、一八九八年大東汽船会社を創立し、航運業を通じて湖南省への積極的進出を図った。一九〇〇年三月五日、日本亡命中の孫文と東京新橋の信濃屋で初対面の後、交流を重ねたようであり、一九一三年の孫文公式訪日の際にも中国興業会社設立問題で孫文と会っ

たものと推測される。

三上豊夷みかみよしのぶ（一八六三—一九四二年）

神戸の海運業者。實野長知の紹介で亡命中の孫文と知り合い、革命派の武装蜂起のため、神戸で武器、運搬船の手配、資金の調達に奔走した。一九〇七年の幸運丸事件が有名である。これは、孫文が萱野を通じて三上に武器・弾薬の広東省汕尾への輸送を依頼し、三上はこれに応じて二八〇〇トンの幸運丸で武器・弾薬を輸送中、清国官憲に発見されそうになり、海中に棄てて逃げ帰った事件。

鈴木久五郎すずきひさごろう（一八七七一—一九四三年）

実業家。埼玉県出身。株売買で巨利を博す。俗称「鈴木」。一九〇六年大産穀の紹介で孫文と知り合う。一九〇七年清朝の要求で日本政府が亡命中の孫文を国外退去させた際、鈴木は革命資金として孫文に三〇万円を与えたといわれる。一九一三年孫文が日本を公式訪問した時、鈴木は長女生誕の折だったので、孫文の名をもらって文字と名づけた。現在大磯町在住の加藤文子氏がその人である。

秋山定輔あきやまだていすけ（一八六八一—一九五〇年）

明治・大正・昭和期の新聞経営者・政治家。岡山県出身。一八九三年「大新報」を創刊。政界の黒幕的存在として裏面で活動し、特に大正初期の桂太郎の新政結成に深く関与した。一九一三年の孫文の初めての日本公式訪問をお膳立てした。初め孫文は一九一二年中の訪問を強く希望したが西園寺内閣の孫文来日不歓迎を察知した桂は、秋山に来日を延期するよう孫文を説得させた。

桂太郎かたろ（一八四七一—一九一三年）

政治家・陸軍大将。山口県出身。兵制研究のためドイツに留学、陸軍建設に尽力した。三度組閣し、第三次内閣時代の一九一三年、日本を公式訪問した孫文と密談、イギリスの勢力を駆逐するために日中が中心となって、提携して立ち上ることを約束した。その後、憲政擁護運動に批判されて組閣二か月で総辞職した（大正政変）。

久原房之助くはらふさのすけ（一八六九—一九六五年）

実業家・政治家。山口県出身。久原鉱業・久原商事・日立製作所を創立。田中義一内閣の通相、政友会総裁などを務める。第三革命失敗後、孫文が日本に亡命していた一九一五—一六六年、久原は陸軍参謀次長田中義一の要請を受けて孫文に多額の資金を援助した。

菊池良一きくちりょういち（一八七九—一九四五年）

明治・大正・昭和期の実業家・政治家。実業界、新聞記者、弁護士を経て一九一五年代議士に当選。政治家として活動する中で、中国革命に関心を抱き、孫文らを支援。孫文の日本亡命の際も熱心にこれを助けた。

山中奉太郎やまなかかへたろう（一八八五—一九六六年）

昭和初期の小説家。大阪出身。陸軍士官学校在学時代に、李烈鈞はじめ多くの中国人留学生と知り合い、中国同盟会に参加。一九一三年の第二革命の折、軍籍を脱し、朝日新聞社通信員として中国に渡り、革命戦に参加、山中未成の名で中国革命通信を送った。大正末期に帰国、昭和期には大衆的青少年少女小説を多数発表。晩年に、第三革命と自己の青春を記録した「実録アジアの曙」を発表した。

大隈重信おおくまのしげのぶ（一八三八—一九二二年）

明治・大正期の政治家。佐賀県出身。青少年期に漢学・蘭学・洋学を学んだ。明治政府にあつて「大隈財政」を展開し、三菱財閥との関係を強めた。一八九八年、板垣退助と憲政党を結成して日本最初の政党内閣（隈板内閣）を組織。一九〇七年党首を辞して早稲田大学総長となった。清朝末期の中国に対しては、共和制を掲げる孫文ら革命派よりも立憲君主制を主張する改良派を支持し、一八九八年の戊戌政変で日本に亡命した康有為を保護した。一九一四年第二次大隈内閣を組織すると翌一五年に、一か条要求を袁世凱政府に提出し、日中関係を決定的に悪化させた。

〔孫文と横浜展〕（有隣堂）より 藤井昇三著

藤井昇三（ふじいしやうそく）

一九二八年東京に生まれる。戦災で兵庫県に疎開。旧制姫路高校、東京大学大学院（国際関係論専攻）で学んだのち、電気通信大学教授、富山国際大学教授を経て、現在は電気通信大学名誉教授、社会学博士。専門分野は中国近代史、近代日中関係史。

藤田

どうもありがとうございました。孫文の思想的な展開を日本との関連の中でお話していただいたと思います。ただいまの藤井先生のご講義に対しまして、どなたかご質問はございますか……。では引きつづき討論に移りますので、その時にご質問をお願いいたします。では先生どうもありがとうございました。

それでは三人の先生方を中心に、討論と質問の時間を作りたいと思います。



孫文と山田純三郎（左）

『愛知大学東亜同文書院大学記念センター 収蔵資料図録』より